

戸田市 令和元年度完了報告書

1. 調査研究概要

I 調査研究の内容

1 カリキュラム・マネジメント検討会議の実施

(1) 年度当初会議 ※資料1-1 「検討会議資料」

① 調査研究の方向性の確認

P D C Aを回し、「何のためにやるのか」という目標を軸に、成果や評価が常に目指す方向と合致しているかというところが大きな課題となることを確認。

② 実践校のこれまでの取組の共有と今後の取組予定について

ア 戸田第二小学校 ※資料1-2 「戸二小資料」

イ 美笹中学校 ※資料1-3 「美笹中資料」

ウ 新曽小学校 ※資料1-4 「新曽小資料」

③ 指導・助言及び質問等 ※資料1-5 「検討会議記録」

ア 県教育委員会 義務教育指導課 課長 八田 聡史 様

イ 共栄大学 教育学部 教授 濱本 一 様

(2) 年度末会議 ※資料2-1 「検討会議資料」

① 令和元年度の実践校の取組について

ア 戸田第二小学校 ※資料2-2 「戸二小資料」

イ 美笹中学校 ※資料2-3 「美笹中資料」

ウ 新曽小学校 ※資料2-4 「新曽小資料」

② 指導・助言及び質問等 ※資料2-5 「検討会議記録」

ア 県教育委員会 義務教育指導課 課長 八田 聡史 様

イ 共栄大学 教育学部 教授 濱本 一 様

2 実践校における校内授業研究会の積極的な実施

- (1) 学校教育目標を具現化するための資質・能力の構造化と評価基準（ルーブリック等の作成を含む）の設定に取り組んだ。あわせて評価の妥当性と汎用性の改善に取り組んだ。
- (2) 外部講師を招聘し、これからの教育の在り方やカリキュラム・マネジメントの必要性についての研修を実施した。
- (3) 授業改善や学校経営の改善につなげるPDCAサイクルの確立を図った。
※以下の実践校の取組を参照

3 研究発表会の実施

- (1) 令和元年11月7日 美笹中学校 ※資料3-1「研究紀要①」
研究主題「未来を切り拓く力を身に付けた生徒の育成
（多面的な教育活動による学力向上の取組）」
全学年公開 参会者約50名
- (2) 令和元年11月19日 新曾小学校 ※資料3-2「研究紀要②」
研究主題「学び合い考えを深め、表現する児童の育成
～教科横断的な教育課程の編成を通して～」
全学年公開 参会者約100名
- (3) 令和2年1月30日 戸田第二小学校 ※資料3-3「研究紀要③」
研究主題「一 動く 一」
低・中・高学年及び特別支援学級公開 参会者約400名

II 成果や課題等 ○…取組や成果、△…課題や改善すべき点

研究1年目となる今年度は、各実践校においてカリキュラム・マネジメントを積極的に推進し、実践を積み重ねた。各実践校においては、それぞれ研究発表会を実施し、研究の成果や途中経過を発表し、市内外の学校に成果の共有を図った。

なお、取組から得られる成果と課題は以下のとおりである。なお、学校毎の成果と課題については別に示す。

- 学校教育目標の具現化に向けて、各種学力調査の結果や児童・地域の実態等を全教員で検証することにより、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力の構造化が進み、教員の共通理解につながった。
- 教科等横断的な児童生徒の学びについて、具体的な手立てについても検討することができ、教員自身のマネジメント力を高めることにつながった。児童生徒の課題解決のために、教師自身が実社会とつながり人材を探し連携する姿も見られた。
- これまで蓄積してきた取組や知見をもとに、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を育むための教科等横断的な取組（PBL等）を実践した。これに伴い、各教科等の見方・考え方についても理解が深まり、かつ、身に付けさせたい資質・能力を育むことに着目した授業研究の在り方について研究を深めることができた。

- プロジェクトの1サイクルごとに、教科等のつながりも関連させて計画と評価の見直しを行ったことで、学びの質を高める実践事例を積み重ねられた。
- 学校作成の「非認知能力育成プログラム」をベースとし、学習指導、生活指導、学習意欲向上の各観点からの非認知能力育成のための総合的な取組を推進した。非認知能力の変容については、来年度に今年度の結果と比較することなどで分析していく。
- PBLに関する掲示板の作成、関連する通信の発行、「新聞閲覧室」の開設等教科等横断的な学習環境づくりを行った。
- 教員が県や市、外部指導者等による研修を受け、教科等横断的な学びについての知見を広げ、カリキュラム・マネジメントの必要性を認識することができた。
- △より実社会と連携した質の高い学びを展開していくため、また、効果測定を効率的・効果的に行うために、Edtechを活用する必要がある。また、学年に地域及び学校運営協議員との窓口となるコーディネーターを効果的に活用できるような組織作りをしていく必要がある。
- △各教科毎の取組と育成する力の整理を改めて行い、次年度の計画等を年間指導計画等に可視化していく必要がある。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内PBLプラン検討研修会 【戸田二小】 ・中学校区3校合同研修会 【美笹中】 ・校内学力向上研修（埼玉県及び全国学力・学習状況調査の分析） 【新曾小】 ・学校課題研修（学習・セサミ指導案検討） 【新曾小】 ・学校課題研修（PBL型授業について） 「創造性（的思考）を学ぶ」～Society5.0時代に必要な資質・能力を育むために～ 【新曾小】
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校教育課程研究協議会報告会 【美笹中】 ・部会研修（生活科の授業研究・研究授業指導案の検討） 指導者：埼玉大学教育学部附属小学校教諭 【新曾小】 ・研修発表会事前打合せ 【新曾小】 ・全体研修（指導と評価の一体化についての研修） 【新曾小】
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修 講義「『主体的・対話的で深い学び』から考えるこれからの授業」（10/7） 講師 上越大学大学院 准教授 阿部 隆幸 氏 【美笹中】 ・カリキュラム・マネジメント検討会議(10/10) 【市教委・各実践校】 指導者 共栄大学 教授 濱本 一 氏 ・校内研究授業(10/21) 指導者 インテル（株）教育事業本部担当部長 竹元 賢治 氏 インテルマスターティチャー 朝倉 一民 氏 【戸田二小】 ・校内部会研修（総合的な学習の時間の授業研究・研究授業指導案の検討） 指導者：戸田市教育委員会指導主事等 【新曾小】

	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修（指導と評価の一体化、学力向上に効果的な取組の共有に係る研修） 【新曾小】
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究授業 【戸田二小】 ・美笹中研究発表会(11/7) 【美笹中・市教委】 講演会「美笹中の取組を踏まえた、効果的なカリキュラム・マネジメント実現への展望」 講師 上越大学大学院 准教授 阿部 隆幸 氏 ・新曾小研究発表会(11/19) 公開授業 各学年1授業 【新曾小・市教委】 ブースセッション（教科横断的な教育課程の編成、セサミストリート・カリキュラム）及びトークセッション
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・資質・能力の育成に係るカリキュラム・マネジメントの効果検証 【各学校】 ・カリキュラム検討研修会（カリキュラムの見直し） 【戸田二小】 ・研究発表会指導案検討 【戸田二小】
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・戸田二小研究発表会(1/30) 【戸田二小・市教委】 指導者 インテル（株）教育事業本部担当部長 竹元 賢治 氏 【戸田二小】 ・上越市教育委員会視察対応 【市教委・戸田二小】 （カリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究に係る実践校との協議） ・研究推進委員会（来年度の研修内容についての検討） 【新曾小】 ・市教委・南部教育事務所学校訪問 研究授業 4年 社会科「わたしたちの埼玉県」 ・PBL型学習についての研究協議 【市教委・新曾小】 ・大阪府茨木市教頭会視察訪問 【市教委・新曾小】
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・事業報告書作成 【市教委・各実践校】 ・校内全体研修（理論研修）(2/6) 「セサミストリート・カリキュラム実践を通じた授業評価」 指導者 早稲田大学人間科学学術院 教授 井上 典之 様 【新曾小】 ・校内カリキュラム検討研修会（カリキュラムの見直し） 【戸田二小】 ・カリキュラム・マネジメントに係る実践研究 琴・尺八教室(2/21) 指導者 瀧川 佐知子 氏、中島 翔 氏 JICA 出前授業(2/25) 指導者 矢田部 建佑 氏 【戸田二小】 ・校内全体研修（理論研修）(2/27) 「資質・能力をどう測る」 IGS株式会社 野口 祐子 様 【新曾小】
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム・マネジメント検討会議(3/23) 【市教委・各実践校】 指導者 共栄大学 教授 濱本 一 氏 ・次年度の研究計画立案 【市教委・各実践校】 ・教育課程の作成 【各実践校】

2. 調査研究の内容

実践校A【戸田市立戸田第二小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

① 学校教育目標を具現化するための資質・能力の構造化と評価基準の設定

学校教育目標「心豊かに 21世紀をたくましく 生き抜く 子」を実現するための資質・能力を「創造力・論理力・学ぶ主体性」とし、具体的な姿をルーブリックにまとめ、6年間を見通した児童の姿を全教員で共通理解の上で、各学年のプロジェクトによる学びを進めた。

また、評価に関しては、客観的な視点でBenesseのデジタルルーブリックやIGSのAi Growを活用しながら、評価の妥当性と汎用性の改善に取り組んだ。

戸二小 育てたい資質・能力のルーブリック

定義
 ○学ぶ主体性…学びの中で創造的・発見的に問いを見つめ、解決の方法を考えながら学んでいる。
 ○論理力…情報を知識を体系的に、論理的に分析し、表現できる。
 ○創造性…今までにないものを定義し、新たな見方・考え方ができる。

	低学年	中学年	高学年
学ぶ主体性	問い、問題を自ら見つけ出し、「すくすく」「ほのぼの」の発見ができる。 「なぜか?どうして?」などの疑問を見つけることができる。 問いに対して興味を持って学ぶことができる。	問い、問題を「解決したい」と思い、自分の学びを自分から進める。 問い、問題を自ら見つけ出し、「すくすく」「ほのぼの」の発見ができる。 「なぜか?どうして?」などの疑問を見つけることができる。	問い、問題を「解決したい」と思い、自分の学びを自分から進める。 問い、問題を自ら見つけ出し、「すくすく」「ほのぼの」の発見ができる。 「なぜか?どうして?」などの疑問を見つけることができる。
論理力	情報を状況によって使い分けられることができる。 簡単な論理を述べられる。 自分の意見と理由を述べられることができる。	情報を状況によって使い分けられることができる。 簡単な論理を述べられる。 自分の意見と理由を述べられることができる。	情報を状況によって使い分けられることができる。 簡単な論理を述べられる。 自分の意見と理由を述べられることができる。
創造性	「そんなことか?」と疑問を抱き、問いかけることができる。 「知らない事柄も自分から調べられることができる。 「新しい」発想があることに基づいて学ぶことができる。	「そんなことか?」と疑問を抱き、問いかけることができる。 「知らない事柄も自分から調べられることができる。 「新しい」発想があることに基づいて学ぶことができる。	「そんなことか?」と疑問を抱き、問いかけることができる。 「知らない事柄も自分から調べられることができる。 「新しい」発想があることに基づいて学ぶことができる。

表1 育てたい資質・能力のルーブリック

② プロジェクト型学習による生活科・総合的な学習の時間を基軸とした教科等横断的な学びのためのカリキュラム・マネジメントの実現



写真1・2 教員の協議の様子

4月の年度当初の段階で単元一覧表や教科書等をもとに、プロジェクトのテーマに沿った各教科等の関連づけを行い、より質の高い学びの実現に向けて教員研修を重ねてきた。また、外部講師を招聘し、これらかの教育の在り方やカリキュラム・マネジメントの必要性についてのレクチャーをいただいた。さらに、地域・保護者とのつながりの必要性について確認するとともに、教員自身も名刺を作成・持参し、実社会とつながる学びの実現に向けての意識改革に取り組んできた。

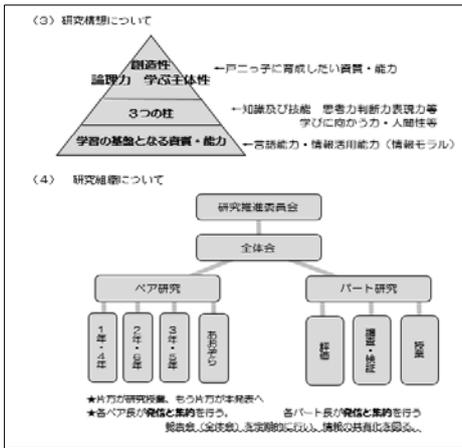


写真3 カリキュラム・マネジメントに係る研修会

③ 授業改善や学校経営の改善につなげる多角的なPDCAサイクルの確立

今年度の研究組織を以下のとおり編成し、多角的・多面的に資質・能力の向上に向けての手立ての検証に取り組んだ。

図1 令和元年度研究組織図



【3パート】主に手立ての考案に取り組む

- ・授業パート：プロジェクトの進め方 (カリキュラム・マネジメントを含む)
- ・調査/検証パート：各種学力調査の分析、プロジェクトにおける資質・能力の検証
- ・評価パート：ルーブリックの運用と評価方法

【ペア学年】主に授業改善に取り組む

- ・1/4年ペア
- ・2/6年ペア
- ・3/5年ペア
- ・あおぞら学級/担外ペア

	プロジェクト前 (1部目)	プロジェクト後 (2部目)	結果について
主体性	【6年1組発表】 0. 612ポイント	【6年2組発表】 0. 633ポイント	一人一人が役割をもち、役割をもち、トライアンドエラーを繰り返すことで、最終的に発表の場が広がった。発表の場が広がったことで、発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。
	【6年3組発表】 0. 609ポイント	【6年4組発表】 0. 628ポイント	プロジェクトの発表よりも発表が上だった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。
論理力	【6年5組発表】 0. 609ポイント	【6年6組発表】 0. 623ポイント	「高直でもない」「低直でもない」と、高直に傾いていく中で発表力が高まったと考えられる。高直に傾いていく中で発表力が高まったと考えられる。高直に傾いていく中で発表力が高まったと考えられる。
	【6年7組発表】 0. 608ポイント	【6年8組発表】 0. 621ポイント	あまそり、0.6ポイントと、発表力が高い発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。
創造性	【6年9組発表】 0. 607ポイント	【6年10組発表】 0. 620ポイント	グループでの発表で、発表力が高まった。発表力が高まった。発表力が高まった。発表力が高まった。
	【6年11組発表】 0. 612ポイント	【6年12組発表】 0. 621ポイント	グループでの発表で、発表力が高まった。発表力が高まった。発表力が高まった。発表力が高まった。
その他の資質・能力	【6年13組発表】 0. 612ポイント	【6年14組発表】 0. 621ポイント	プロジェクトの発表では発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。
	【6年15組発表】 0. 622ポイント	【6年16組発表】 0. 631ポイント	プロジェクトの発表では発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。発表の場が広がった。

表2 非認知能力をもとにした手立ての活用

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

①について

学校教育目標の具現化に向けて、各種学力調査の結果や児童・地域の実態等を多面的に全教員で検証し、育成する資質・能力「新たな価値を生み出す子(創造性)」の構造化について考察することで、教員自身のマネジメント力が着実に高まるとともにその手立ての有効性が客観的データをもとに検証できた。(右表)

②について

児童の課題解決のために、教師自身が実社会とつながり必要な人財を探し連携する姿が見られ始めた。(右写真)

③について

プロジェクトの1サイクルごとに、計画と評価の見直しを教科等とのつながりをもとに学びの質を高めるプロジェクトの実現に向けて取り組むことができた。

【改善方策】

より実社会と連携した質の高い学びを展開していくために、EdTechの活用と学年に地域及び学校運営協議員との窓口となるコーディネーターを効果的に活用していく組織作りをしていく必要がある。



写真4・5 教師のマネジメント力の向上

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
8月	PBLプラン検討研修会(22日) 学年PBL検討
9月	研究授業指導案検討 学年PBL検討
10月	校内研究授業① 学年PBL検討
11月	校内研究授業② 研究発表会指導案検討
12月	カリキュラム検討研修会(カリキュラムの見直し) 研究発表会指導案検討
1月	研究発表会(1/30)
2月	カリキュラム検討研修会(カリキュラムの見直し) JICA出前授業 琴尺八教室
3月	研究内容検討会

実践校B【戸田市立美笹中学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
未来を切り拓く力を身に付けた生徒の育成～多面的な教育活動による学力向上の取組～
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

本校では、「未来を切り拓く力を身に付けた生徒の育成～多面的な教育活動による学力向上の取組～」を学校研究課題とし、学校で実施する多面的な教育活動と、それによって育成が期待できる未来を切り拓く力（汎用的能力・21世紀型能力・非認知能力等）の関係を明らかにし、育成する力を明確にした教育活動を多面的に行うことが、それぞれの能力の育成、ひいては全体的な学力の向上につながると考え、研究と実践を進めることとした。

① NIEを活用した言語能力や情報活用・分析力、論理的思考力等の育成

新聞を活用した授業実践であるNIE（Newspaper in Education）教育の推進校としてのこれまでの知見の蓄積を土台としながら、読解力や表現力等の言語能力、情報活用・分析力や情報の真価を問う能力、論理的思考力や批判的思考力、課題発見・解決能力などの育成を目指すための教科等横断的な取組を実践した。新聞という共通の素材を使い、複数の教科等において取り組むことで、各教科等の見方・考え方に基づく多様な観点からの学習の基盤となる資質能力を身に付けることを目指した。

② プロジェクト型学習の導入を基軸とした、学習指導、生活指導、学習意欲向上の各観点からの非認知能力育成のための総合的な取組の推進

学校教育活動における多面性（学習指導、生活指導、学習意欲向上）に注目し、学校独自に策定した「非認知能力育成プログラム」をベースとしながら、非認知能力を中心とした資質・能力の育成に向けて学校資源を様々な活動にどのように配分するかという視点も含め、学習指導、生活指導、学習意欲向上の3つの観点からの取組を、プロジェクト型学習を基軸に総合的に実践した。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

① NIEを活用した言語能力や情報活用・分析力、論理的思考力等の育成

主に、NIEに関わる環境づくりと、NIEに関わる授業実践を行った。

まず、NIEに関わる環境づくりでは、新聞通信「社会の窓」の発行、各学年に「新聞閲覧コーナー」の設置、「新聞閲覧室」の開設、各学級に「毎日の新聞が届くシステム」の構築を行った。その結果、生徒にとって新聞が身近になり、世の中の動きに関心をもつ生徒や、話題の出来事を新聞で確認する姿などが見られるようになった。

次に、NIEに関わる授業実践では、教員が埼玉NIEアドバイザーの指導を受け、各教科で新聞活用の可能性を検討・実践した。特に第2学年を中心に、「いっしょに読もう新聞コンクール」への参加、社会科の授業での「まわし読み新聞」の取組、総合的な学習の時間での「よせあつめ新聞」の実践等を重ね、NIE推進の可能性を広めることができた。

今後、各教科毎の成果と育成する力の整理を行い、取組の計画等を年間指導計画等に見えるようにしていく。

② プロジェクト型学習の導入を基軸とした、学習指導、生活指導、学習意欲向上の各観点からの非認知能力育成のための総合的な取組の推進

主に、生徒会活動と学年経営において実践を行った。生徒会活動では、生徒会活動そのものを「美笹中を仲良くしようプロジェクト」と命名し、各委員会と連携しながら定例の活動や全校集会を活用して取組を進めた。課題と目標を共有し、その解決に向けて生徒が自ら考えて行動するプロジェクト型学習は中学校の生徒会活動にはとても有効であった。生徒が自分たちの取組によって学校がより良く変容していく様を実感できるように、教員の指導の在り方や支援体制を充実させることが課題の一つである。

学年経営では、主に第1学年が「学年づくりプロジェクト」を行った。実現したい生徒像の実現のために、「見える化」と「共有」を行い、生徒が主体的に動けるようになる指導を年間を通じて行った。特に「見える化」については、「目標」や「予定」だけでなく、「取組の経過」や「生徒の成長」の可視化にも取り組んだ。結果、生徒の学年への所属意識を高めることが出来た。本校の研究発表会において、生徒が来校者に対して自信をもって案内できたことは、取組の大きな成果である。

また、県学力・学習状況調査の質問紙調査によると、「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦していますか。」の項目において、「している」の回答に増加が見られ、「していない」が減少している。引き続き、プロジェクト型学習を進めることによって学校生活にやりがいを感じ、挑戦する意欲へとつなぎたい。

表3 【県学力・学習状況調査】

質問番号(12)難しいことでも失敗をおそれないで挑戦していますか。

	平成30年度	令和元年度
している	12.6	26.5
どちらからといえば、している	47.1	32.5
どちらからといえば、してない	31.1	33.7
してない	9.2	6.0

(4) **実践校における年間実施スケジュール**

月	取組内容
8月	・美笹中学校区3校合同研修会・3校合同学校運営協議会
9月	・中学校教育課程研究協議会報告会・研究発表会実施計画の検討
10月	・校内研修会(10/6) 講義「『主体的・対話的で深い学び』から考えるこれからの授業」 講師 上越大学大学院 准教授 阿部 隆幸 氏
11月	・研究発表会(11/7) 講演会「美笹中の取組を踏まえた、効果的なカリキュラム・マネジメント実現への展望」 講師 上越大学大学院 准教授 阿部 隆幸 氏
12月	・これまでの取組の反省と課題の検討
1月	・研究推進委員会の在り方の改善、次年度以降の学校研究課題の検討
2月	・研究推進委員会による検討会議
3月	・本年度の成果と次年度の課題の確認

実践校C【戸田市立新曾小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

現代的な諸課題への対応力のために不可欠な「7つの力(豊かな言語能力、伝え合う力、協働力、聞く力、やりぬく力など)」を身に付けるための授業改善の在り方等の研究

セサミストリート・カリキュラムの効果的な導入による、「夢をえがき、計画を立て、行動する」児童の育成や多様性への理解等の推進

3部会による組織的な実践（以下参照）

①授業づくり部

【主体的・対話的で深い学びの視点で授業改善をすることで、新曾小の児童に身に付けさせたい資質・能力を効果的に育成できるだろう】

- 「主体的な学び」の実現 課題設定と振り返りの改善
- 「対話的な学び」の実現 学び合いの充実
- 「深い学び」の実現 プロセスの充実
- 「資質・能力3つの柱」の手立ての充実

②キャリアデザイン部

【非認知能力を高めることで、新曾小の児童に身に付けさせたい資質・能力を効果的に育成できるだろう】

- セサミストリート・カリキュラムの授業づくり
(指導案検討・授業実践・振り返り・改善)
- 全体計画の作成
- 年間指導計画の作成
- ワークシート活用方法の検討

③カリキュラムマネジメント部

【教科横断的な教育課程を編成することで、新曾小の児童に身に付けさせたい資質・能力を効果的に育成できるだろう】

- 各教科の見方・考え方を活用した、生活科・総合的な学習の時間の編成（単元開発）
- 各教科の見方・考え方を生かした、教科横断的な教育課程の編成
- 各教科の見方・考え方の確認
- 「7つの力（新曾小で身に付けさせたい資質・能力）」の検証・改善
- ルーブリックの作成

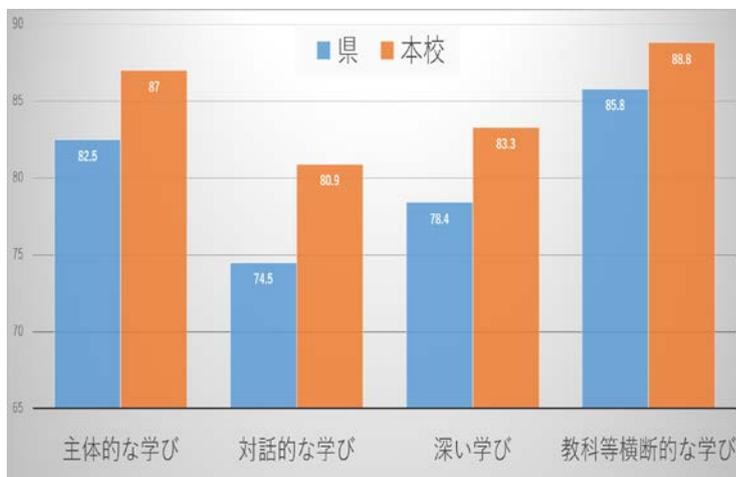
(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

- ①新学習指導要領の重点である「主体的・対話的で深い学び」や「教科等横断的な学び」についての質問項目について、県平均より特に高い結果となった。

図2 授業に関する意識調査の結果（全国及び埼玉県学力・学習状況調査より）

- 課題の解決に向けて、自分で考え、自分で取り組んでいる。(87.0%) (主体的な学び)
- 先生や友達の話をしっかり聞き、自分の考えを伝えることができている。(80.9%) (対話的な学び)
- 話し合う活動を通じて、考えを深めたり、広げたりすることができている。(83.3%) (深い学び)
- 授業で学んだことを、ほかの学習に生かしている。(88.8%) (教科等横断的な学び)

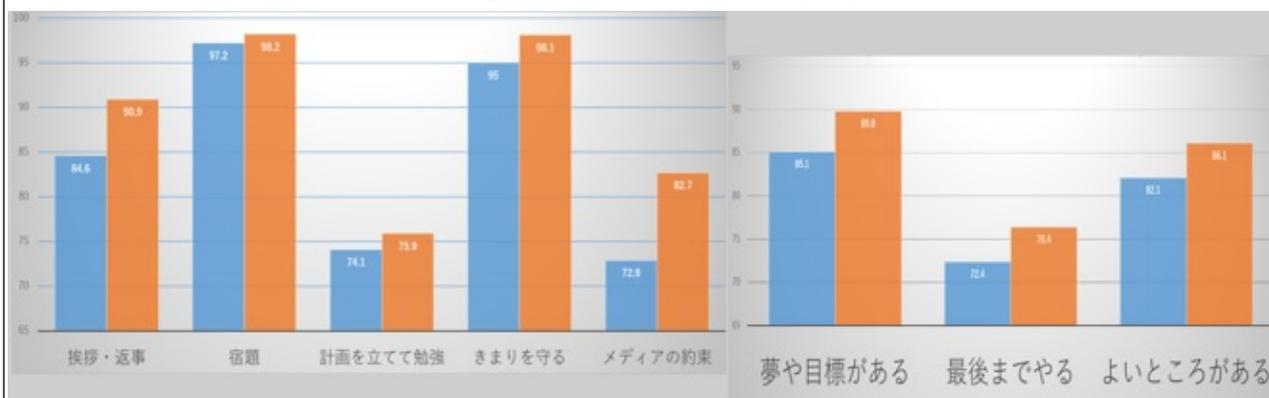


「よくできる」 + 「だいたいできる」の合計

- ② セサミストリート・カリキュラムの基本理念である「夢をえがき、計画を立て、行動する」に該当する質問項目で、県平均より特に高い結果となった。

図3 非認知能力や多様性に関する意識調査の結果（全国及び県学力・学習状況調査より）

「よくできる」 + 「だいたいできる」の合計



- 進んで挨拶や返事をする。(90.9%) (生活習慣)
- 宿題をしている。(98.2%)
- 家で自分で計画を立てて勉強をしている。(75.9%) (学習習慣)
- 学校のきまりを守る。(98.1%)
- ゲームやネットについて、家の人と約束を決めている。(82.7%) (規範意識)
- 将来の夢や目標をもっている。(89.8%)
- 始めたことは最後まで終わらせる。(76.4%) (やり抜く力)
- 自分にはよいところがある。(86.1%) (自己肯定感)

【課題と改善方策】

「新曾小で身に付けさせたい資質・能力」が7項目あり、全てを網羅することに課題があったため、7つの力について全職員で見直し、焦点化・再定義していく。

セサミストリート・カリキュラムについて、他教科や学校行事と適切に関連付けてカリキュラム・マネジメントを行うことで、教育効果の最大化を図っていく。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・学力向上研修（埼玉県及び全国学力・学習状況調査の分析） ・学校課題研修（学習・セサミ指導案検討） ・学校課題研修（PBL型授業について） 「創造性（的思考）を学ぶ」～Society5.0時代に必要な資質・能力を育むために～
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・全体研修、研究部会（研究発表会に向けて） ・部会研修（生活科の授業研究・研究授業指導案の検討、授業準備） 指導者：埼玉大学教育学部附属小学校 教諭 ・研修発表会打合せ（セサミ：為田裕行様・キャリアリンク小池 紗也香 様） ・全体研修（指導と評価の一体化についての研修）
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・部会研修（総合的な学習の時間の授業研究・研究授業指導案の検討） 指導者：戸田市教育委員会指導主事等 ・全体研修（指導と評価の一体化に向けた研修） ・研究推進委員会（研究発表に向けた取組の確認） ・全体研修（学力向上に効果のあった取り組みの共有）
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究部会（研究授業準備、市教委・南部教育事務所学校訪問 指導案検討） ・研究発表会（11/19） 公開授業 各学年各1授業 ブースセッション 1 教科横断的な教育課程の編成 2 セサミストーリー・カリキュラム トークセッション ・全体研修（研究発表反省まとめ）
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究部会（研究発表反省まとめ、市・教育事務所学校訪問 指導案検討） ・全体研修（市・教育事務所学校訪問研究授業全体検討）
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会（来年度の研修内容についての検討） ・市教委・南部教育事務所学校訪問 研究授業4年社会科「わたしたちの埼玉県」 PBL型学習についての研究協議 ・大阪府茨木市教頭会視察訪問 公開授業4・5年（セサミ）、3年（総合）
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・全体研修（理論研修）（2/6） 「セサミストーリー・カリキュラム実践を通じた授業評価」 指導者 早稲田大学人間科学学術院 教授 井上 典之 様 ・全体研修（理論研修）（2/27） 「資質・能力をどう測る」 IGS株式会社 野口 祐子 様 ・全体研修（次年度の研修の方向性と内容について）
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研修計画作成

3. 提出する参考資料（実践地域の取組の概要が分かるもの）

- ・各校研究紀要
- ・各校研究発表会指導案綴り/実践事例集等